

ヌース・ポイエーティコスと「無意識」：ブレンターノにおけるアリストテレスの魂論と、心的現象の学との両立可能性について

村田，憲郎
東海大学文学部：教授

<https://doi.org/10.15017/7392674>

出版情報：哲学論文集. 61, pp.73-103, 2025-09-27. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai
バージョン：
権利関係：



ヌース・ポイエーティコスと「無意識」

ブレンターノにおけるアリストテレスの魂論と、心的現象の学との両立可能性について

村 田 憲 郎

はじめに

十九～二十世紀オーストリアの哲学者フランツ・ブレンターノ (Franz Brentano, 1838-1917) は、よく知られるようにアリストテレス研究から出発した。一八六二年に『形而上学』についての研究書『アリストテレスによる存在者の多様な意味について』(Vom der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles, 以下MBS)、一八六七年には『魂について』の研究書『アリストテレスの心理学、特に彼のヌース・ポイエーティコスの教説について』(Die Psychologie des Aristoteles, insbesondere seine Lehre vom NOUS THEHTIKOS, 以下PA)を著す。ギュムナジウム時代のハイデガーが、前者を読んで「存在の問い」に目覚めたというエピソードは有名であろう。後者もまた、ブレンターノ二十代の書ながら卓越した洞察を示し、同時代の一流のアリストテレス研究者たちの眼を引いている¹⁾。

他方、ブレンターノは近代心理学の黎明期にあつてその誕生に深く関わった哲学者としても有名である。アリストテレス

の魂論に続いて発表した『経験的立場からの心理学』(Psychologie vom empirischen Standpunkt, 以下 P E S と略記)において、「心的現象の学」と定義される新たな心理学を提唱し、この書を起点としてマルティ、シュトゥンプフ、トワルドフスキ、マインングら多様な顔触れをもつブレンターノ学派が派生していく(フッサール現象学もこの学派の一ヴァリアントとして位置づけることができる)。またこの書は実験心理学の祖と言われるヴィルヘルム・ヴントの『生理学的心理学要綱』と奇しくも同じ一八七四年に出版され、両者は心理学史においてもよく並び称せられる。統制された物理的刺激を与えて生じる感覚内容を内的に観察するような心理学の実験に従事する、ヴントにはじまる主にドイツの「内容心理学」(Boring, 384-385)に対して、心的な「作用」の志向性に着目する、哲学的傾向の強いブレンターノ学派ないしオーストリア学派の心理学は、「作用心理学」と呼ばれる(ibid., 139)。

さて、こうした学説史的な脈絡を念頭に置くと、気になるのは P A におけるアリストテレスの魂論と、P E S で唱えられた心的現象の学との関係である。そこでまずは、アリストテレスの魂論から、無歴史的に妥当しうる議論を合理的に再構成して、当時最先端の心理学理論を提示したのか、と考えられるかもしれない。しかしこの点について、ブレンターノは一筋縄ではないかな哲学者であり、なかなか単純な関連づけを許さないところがある。まず P E S は、心理学を实体としての魂の学と規定することをやめ、心的現象の学と定義した(cf. PES, 6-28)⁽²⁾。また、感覚が生じることを外的な刺激からの因果的所産だと捉えるほうがむしろアリストテレス本来の考えであるように思われるが、心的現象の「志向性」ないし作用という側面に注目するブレンターノにはその見方はどちらかといえば希薄である。

このように P A と P E S との関係は予断を許さないものであるが、本論では最近の研究も踏まえつつ、現時点での筆者なりの見解を示したい。そこには P A の中心的テーマであるヌース・ポイエーティコス⁽³⁾の解釈も関わる。すなわち、ブレンターノはアリストテレスの魂論において、ヌース・ポイエーティコス⁽³⁾を無意識の働きとしたのだが、この無意識の想定は一見すると、心的なものが原則的に内的に知覚されている P E S の議論に矛盾するように思われる。しかし本当のところは、魂の

活動であるかぎりでの無意識の働きは、内的に知覚され意識されているのが魂そのものではなく心的現象であるというPESの基本的な構えとは無矛盾的に両立可能であり、無意識の作用がPESの議論の背景で暗黙裡に存立していても差し支えない⁽³⁾。この事情に本論では迫ってみたい。

むしろPAが十分に紹介されていないという事情に鑑みて、本論では2部構成とし、前半ではPAにおける無意識の働きかけとしてのヌース・ポイエーティコスの体系的な位置づけを試みる。ただし筆者はアリストテレス研究者ではないため、この解釈の独創性の正確な評価は筆者の手にあまる。そこでここではプレントナーノのテキストに内在的に理解可能な限りでこの議論を提示するにとどめたい。そして後半では、PESの問題圈においてこの議論が成立する余地を確保するために、心的なものの範囲を、そこで主題になっている心的現象よりも若干拡張することを試みる。具体的には、Kriegel (2017) の議論を参考に、心的なものの本質的特性は志向性であるが、これに対して同じく本質的特性として挙げられている内的知覚は、あくまでも心的現象の必要十分条件であって、心的なものと心的現象には概念上のずれがあり、範囲が異なることを示す。PESの議論においても、まさにこの範囲の相違のうちに、無意識の作用の存立する余地があるのである。

一、『アリストテレスの心理学』における諸能力の体系とヌース

まずはPAのアリストテレス魂論の解釈を紹介する。興味深い論点はたくさんあるが、本論ではできるだけコンパクトに、魂の諸能力の体系的叙述を試みる。

一、一、方法論

まず能力を論じるさいの方法論に注目しよう。能力と言われるものが潜在的な傾向性のようなものであるとすれば、その

能力が発揮されなければ確認できないのだから、それはその現実の活動に即して規定されるべきであろう。さらに、その活動がどのような活動であるのかは、その対象に即して規定されるべきである。例えば色を知覚する能力は、実際に色を知覚する活動に即して分析・規定されるべきであるし、色の知覚というこの働きそれ自体は、目の前にある色そのものの性格に即して規定されるべきである。プレントナーノが「概念からすれば、現実態Actは潜在態Potenzよりも先立ち、対象Objectは現実態よりも先立っている」(PA, 75)⁽⁴⁾と述べるのは、このような意味においてであるが、この方法的順序はアリストテレス自身が明言している(二巻四章415a14-24)⁽⁵⁾。

じつさいそこで「相關する対象 *ἀντικείμενα*」としては、栄養と、感覚されるものと、思惟されるものの三種類が挙げられる(*ibid.*)。したがってこれらに対応して、栄養摂取能力、感覚能力、思考能力が想定され、これらが魂の植物的部分、動物的部分、人間的部分に対応する、というように議論が進められると思われるかもしれない。ところがプレントナーノは、この区分とは独立に、二つの原則を導入し、そこから導出して諸能力を列挙するという方針をとっており、独特の仕方で諸能力の機能に体系性を与えている。その議論は以下の通りである。

一般に何かが何かに働きかけ、効力を及ぼすさいの原則として、彼は「類似性の法則」および「努力の法則」とでも呼ぶべき⁽⁶⁾二つの法則を挙げる(PA, 628)。まず前者について、例えば人間は人間から生み出され、また大工が作る家は、大工がもつ家についての観念から生み出される。つまり、自然の場合であれ技術の場合であれ、同じ類のもの、「類似のものが類似のものを生み出す」(PA, 62)という法則が成り立つ。アリストテレスは『範疇論』冒頭で、同じ類に属するものを「同義的なもの *ὁμώνυμα*」(1a6)と呼んでいるので、上の法則は、あらゆる生成するものは同義的なものから生じる、とも表現される⁽⁷⁾。

次に、どんな働きかけも一つの努力から生ずる、という法則がある(*ibid.*)。この場合の努力とは現代の私たちが通常使う言葉の意味での努力より広いものである。生物とは無縁なところにもこの努力は成立し⁽⁸⁾、例えば温かいものがそれと接触し

ているものを温かくするよう働きかける場合がそれである。そこには温かさという特性の形相が、直接触れるものに伝わるという仕方^⑧で、形相が関わっている。これが生物および人間になると、努力はさらに欲求と関わってくる。医者は健康の概念にもとづき、患者の回復をもたらしようと欲する。この場合には医者があらかじめもつ健康の概念が形相にあたる。

この努力の法則は、先の類似性の法則にもとづいている（つまり二つの原則は相互に独立ではなく、努力の法則は類似性の法則に依存していると思われる）。ここでの一般的構造は、働きかけるもの、効力を及ぼすもの、効力を受けるもの、働きかけられるもの、効力を受けるもののうちにあらかじめ可能性としてあり、そのような意味では両者は同じ形相をもち類似していると言える点にある。ただし形相は前者においては現実性として、後者においては可能性としてある。働きかけるものが現実に効力を及ぼし、効力を受けるもののうちにある可能な形相が現実のものになることによって、何かが生み出されるのである。

一、二、法則からの導出と類比の体系

さて以上を踏まえて、植物、動物、人間における努力について考えてみる（PA, 65）。植物の場合、努力とは意識を欠いた「盲目的衝動」（PA, 59, 65）による生命維持活動に尽きるものであり、栄養摂取として外界から物質を取り込み、個体および種の維持と完全化に役立てる。これが動物の場合には、「食らうべき食物を見、食らうことの表象を持ち、食物を食らうことを欲求し、そして現実^⑨にその食物を食らう」（PA, 65）。つまり、動物は食物となるものを知覚することができ、その表象を持つことができるのでなければならず、それにもとづいて欲求をもつはずだと（ブレンターノによれば）アリストテレスは考えている。そしてその欲求にしたがって捕食行動をするのであり、動物の生命維持のための努力は、こうした一連の動作に対応しているのである。さらに人間の場合には、たとえば大工が家を建てる場合、彼は家の普遍概念をもち、その概念が家を建てるようとする大工の欲求を惹起し、この欲求にしたがって体を動かして家を建てる。

こうしてみると、植物的な働きと、動物的・人間的な働きとの間には、意識されているか否かという大きな違いがあることがわかる。後者の場合には、努力の目標となるものをあらかじめ捉える必要があり、把握の段階が先行する。またそれをもとに欲求だけでも、さらに身体を動かさなければ目標は実現されないから、運動する段階が後続することになる。こうして、形相を捉える段階、その形相の実現を欲求する段階、体を動かす段階の三つのフェイズがあることになる。プレンターノはこのようにして努力の法則から、

- (a) 「形相を捉える *formertassend* (統握的な *apprehensiv*)」能力
- (b) 「欲求する *begehrend*」能力
- (c) 「運動する *bewegend*」能力

の、三つの能力を導出するのである。

そこで、アリストテレスが二卷三章冒頭(414a31)で挙げている、

- (α) 栄養摂取能力
- (β) 欲求能力
- (γ) 感覚能力
- (δ) 場所的運動の能力
- (ε) 思考能力

という5つの能力を念頭に置くと、先の三つはそれぞれ(a)が(γ)の感覚能力、(b)が(β)の欲求能力、(c)が(δ)の場所的運動の能力に対応し、要するに植物的部分の能力である(a)と人間的部分の能力である(ε)とを度外視した、動物的部分の三つの能力を表したものだと考えられるかもしれない。

しかしブレンターノはそう考えていない。むしろ、魂のうちで、物質・肉体に属する動物的部分と、精神に属する人間的部分との双方が、いずれも(a)、(b)、(c)の三つの能力を備えていると考えている。つまり、動物的な感性的部分が感覚・欲求・運動能力をもつと同様に、人間的な知性的部分もまた、(可知的)形相を受け取る能力、(理性的)欲求能力、(理性的に)身体を動かす能力をもっていると考えられるのである。

彼によれば、このように魂の感性的部分と、知性的部分とがもつ諸能力は、互に対応する類比的な体系をなしている。この構えによって、人間の理性的なさまざまな認識や行為も無理なく説明できる。たとえば『ニコマコス倫理学』における諸議論も、理性的な意志を想定することで平易に理解できよう(Cf. PA, 154^{ff})。魂論でも同様に、「欲求する能力 $\delta\pi\epsilon\kappa\tau\iota\kappa\acute{o}\nu$ 」のうちには知性的欲求もまた、「場所的に運動する能力 $\kappa\iota\eta\tau\iota\kappa\acute{o}\nu\ \kappa\alpha\tau\grave{\alpha}\ \tau\omicron\rho\omicron\nu$ 」のうちには精神的に動かす力もまた、〈…〉区別されずに含まれていると考えてもよからう」(PA, 68)と言われる。

こうして努力を分節化して出てくる三つの能力が、類比的体系として感性的部分と知性的部分との両者に割り当てられるが、しかしブレンターノはそれにも甘んじておらず、さらに、植物的部分に割り当てられた栄養摂取の能力も、類比的体系に取り込もうとする。これをどのように組み込むか。そこで彼はなんと、植物的部分がもつ栄養摂取能力の類比物として、知性的部分の第四の能力、ヌース・ポイエーティコスを導入するのである。

彼によれば、知性的部分と、その他の2つ、植物的および感性的(動物的)部分との区別は、植物的部分と感性的部分とのあいだの区別よりも大きい(PA, 68^g)。というのも、動物あるいは人間において、魂の植物的部分と感性的(動物的)部分とは同じ一つの身体を担い手としており、分ち難く結びついているのに対して、知性的部分は身体に属しておらず、そ

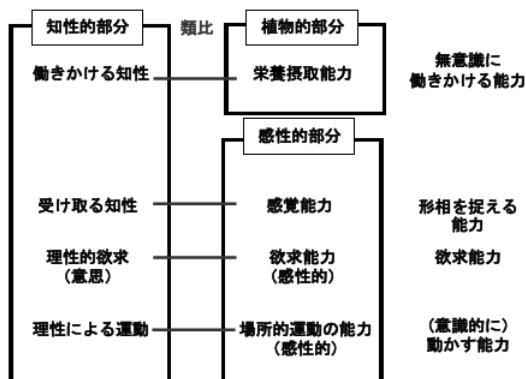
の他の部分から分離可能であるからである。

したがって、類比は植物的部分と感性的部分とを合わせたものと、知性的部分との間に、より完全に成り立つ。とすれば、前者の側に、まず第一に意識を欠いたまま衝動的に働く力としての栄養摂取の能力があり、さらに（a）形相を捉える能力、（b）欲求する能力、（c）運動する能力の三つと、合わせて四つの能力が帰されるのだから、後者の知性的部分にも、先の三つの能力に加えて、無意識的に働く能力がなければならぬ。それがすなわち、ヌース・ポイエーティコス、働きかける知性 *wirkender Verstand* に他ならない。

ちなみにこれと区別されて、知性的部分において「形相を捉える」能力にあたるものは、可知的なものを受容する能力であり、これをプレンターノは受け取る知性 *aufnehmender Verstand* と呼んでいる。この受け取る知性についても次に論じたい。

一、三、三つのヌース

一般にアリストテレスの理性論では、能動理性と受動理性、ヌース・ポイエーティコスとヌース・パターティコスとが区別されるようだが、この点についてプレンターノは、後者をさらに区別し、受け取る知性と変様を受ける知性に分割する。前者は可能的知性（ヌース・デユナメイ）とも呼ばれ、後者のほうが勝義でのヌース・パターティコスとなる。これらを順次見た上で、ヌース・ポイエーティコスについて考えよう。



一、三、一、作用を受けることの二義性。受け取る知性（ヌース・デュナメイ）

まずプレンターノは、働きかけること、効力を及ぼすことに対する、被ること、効力を受けること *Leiden, paŕceivē* について、それが二義性をもつことを繰り返し指摘しているが、この点は非常に重要である。まずこの二義性は感覚能力において確認され（PA, 79-81）、それとの類比において受け取る知性についても言われている（PA, 126-7, 137, 147）。

アリストテレス自身も述べるように（『魂について』二巻五章、417b3 参照）、働きかけを受けると言われる場合、或るものがそれと異なるもの、「反対のもの」によって壊され、消滅する場合と、もともと持っている可能的なものが、類似のものによる働きかけを受けて現実的になることが区別される。例えば、赤い色のものが黄色くなる場合、赤は消滅し、黄色がそれと入れ替わる。あるいは、温かいものが冷たくなるならば、温かいという特性は失われ、冷たいという特性がそれと入れ替わる。しかし、眼という感覚器官が赤い色を受け入れることは、物理的な何かが破壊されて消滅することではない。黒い瞳の色が物理的に赤くなるわけではない。そこでは赤い色という形相が感覚器官において受け取られ、赤を感覚する能力、可能態としての赤さが、赤いものの働きかけによって現実態となるのである。こうしてプレンターノは、物理的に *physich* 受け入れることと、客観的に *objectiv* 受け入れる¹² ことを区別する（PA, 120）。或るものが物理的にもともと持っている特性とは異なる特性を受け取るならば、もともととの特性は破壊され、変様を被ることになる。しかし眼のような感覚器官がそれに対応する色の形相を受け取ることは、客観的に受け入れることである。

この区別は魂の知性的部分における、受け取る知性について論じる箇所（PA, 120ff）で明示的に説明されるが、プレンターノがすでに感覚論の文脈でもこの区別を前提していることにも注意すべきである（cf. PA, 80note6）。というのもこれは感性にも妥当する議論である点にその眼目があるからである。この論点は、なにゆえ魂の知性的部分は、肉体から分離可能と言われるのか、という大きな問題にかかわる。

アリストテレスにおいては、身体が可滅的であり、それとともに魂の植物的部分と動物的部分もまた可滅的なのであるが、

それに対して人間的・知性的部分だけには不滅であり不死であると言われる。この奇妙な説は、アリストテレスがこの部分を肉体から「分離可能」だと考えたことに帰着するが、この点をどう理解可能なものにするかが問題である。ブレンターノによると、従来の議論は以下のように整理される。すなわち、知性はあらゆる存在者について考えることができ、あらゆる存在者を受け入れることができるが、そのためには、知性自身が物理的に限定された存在であることはできず、特定の状態・特性をもつことはできない。もし特定の状態・特性をもつならば、それ以外のものを受け入れることができないからである。それゆえ魂の知性的部分は、特定の状態・特性をもたず純粹であり、身体から独立していなければならない (PA, 120)。

しかし、ブレンターノはこの議論を以下のように批判する。すなわち、そのような議論をするならば、感覚器官についても、身体に属しており、物理的状态・特性をもっているために、同じ理由でさまざまな感覚の質を受け入れることはできないことになる。しかしじつさいにはそんなことはなく、触覚の担い手である肉体は、それ自身が物質的なものとして一定の温度をもつが、にもかかわらずさまざまな温度を感じることができる。つまりそこでは、温度の感覚器官である手などの皮膚が、物質の世界に属し、特定の状態や特性を物理的に受け入れていることと、温度を感じる器官として、さまざまな暖かさや冷たさを客観的に受け入れることが区別されるべきなのだが、従来の議論はその区別をしてはいなかったのである (cf. PA, 121)。

物理的に受け入れることから区別される、客観的に受け入れることは、まさに志向性の原型となる考え方だと言える。そしてこの議論は知性的部分が抽象的な思考内容を受け入れるというだけではなく、感性的部分、感覚においても妥当な論点なのであり、志向性が単に考えることだけでなく見ることや聞くことも含むのと同様、非常に広範囲におよぶ考え方なのである。

ところでこの物理的／客観的という区別を採用することで、感官がそれに固有のあらゆる感性的質を受け入れることができるかと認めるならば、今度は、魂の知性的部分が肉体から分離可能な純粹なものである必要がなくなってしまう。つまり、

知性的部分は感覚器官と同様に、肉体に属していても差し支えないことになってしまう。そこでプレントノーは、もう少し強い説明を与える。物理的に受け入れることと客観的に受け入れることが区別されるにもかかわらず、感覚においては前者が後者に影響を与えるケースがままある。典型的な例は温かさや冷たさであろう。これは触覚の対象であり、触覚は暖かさを感じる時感覚器官として触れるものの温度を客観的に受け入れているが、しかしこの場合同時に、触れる手が対象の温度によって物理的に影響を受け、温かくなったり冷たくなったりもしている。それに応じて、対象の温度を適切に感じる事ができなくなり、客観的に受け入れる能力に支障が出る。手そのものと同じ温度のものの温度は感じにくい、手よりも極端に冷たいものや熱いものの温度は感じやすいだろう。このことは、感官が物理的な身体に属していることを示している (PA, 121)。また同様に、強すぎる音や光を受けると、眼や耳が一時的に麻痺したり損傷を受けたりすることがある。つまり感官の場合には、客観的に受け入れられるものの強度には限界があり、度を過ぎると物理的な影響を被り、感官が破壊されてしまうのである (PA, 127)。

ここではじめて、感性と、身体に属していない知性との相違がはっきりする。可知的な対象の場合には、何かを客観的に受け入れるさいにそれに付随して物理的な影響を被ることもないし、また、大きすぎる、抽象度が高すぎるなど対象が度を過ぎていくからといって、その対象について考えると知性が麻痺したり、破壊されたりすることもない。これらの理由から、知性は身体には属しておらず、肉体から分離可能であると考えられる。知性的部分のみが分離可能であることの説明は、この地点ではじめて与えられる。

さてこのように見ると、先に見た、働きかけを受けることの二義性について理解することができる。赤いものが黄色くなり、温かいものが冷たくなるように、もともともっていた性質が破壊されて別の状態や特性が生じるとき、物理的に変様が起きている。しかし、感覚において可感的な対象の形相を受け入れるとき、また同様に、知性において可知的な形相を受け入れるとき、それらは客観的に受け入れているが、何も破壊されておらず、あるいは受け入れる能力が支障をきたすほどに

は破壊されてはいない。ブレンターノが「受け取る知性」と訳したヌース・デュナメイにおいては、後者の働きかけが起きている。

一、三、二、表象内容（ヌース・パテーティコス）

この受け取る知性 *aufnehmender Verstand* は知性的部分 *intellectiver Theil* に属する。上のような議論から、この受け取る知性はまずは純粹に精神的なものであり、物質的なものから独立していると言える。私たちが思考するとき、純粹に可知的な思考内容を受け取るのはこの能力のおかげであり、要するに端的に思考能力と呼ばれているのはこの能力である。¹⁴⁾

しかしブレンターノによれば、この受け取る知性は、それ単独で純粹に抽象的な思考内容を受け取ることはできず、可感的な土台が提供される必要がある。¹⁵⁾ この可感的な土台とは表象内容 *φαινόμενα* である。ちょうど三角形についての幾何学的な証明について考えるときに、私たちは純粹に概念的に考えることはできず、紙の上に作図したり、少なくとも想像の上で具体的な三角形を範例として思い描いたりしなければならない。この作図された・思い描かれた三角形が三角形の表象内容となっているわけである。

表象内容を提供する表象能力は、魂の感性的部分に属する。ブレンターノによれば表象内容は、感覚的知覚において外界の対象から感覚が受け取る可感的形相と同じものである (PA, 1023) が、眼の前に知覚対象がない場合でも、表象能力によって思い描くことができる。三角形の証明において角度や辺を図形から独立に思い浮かべることはできず、角度や辺の概念について考えるさいにもその図形の表象内容に依存することになるので、こうして可知的な *intelligible* 思考内容は可感的な *sensible* 表象内容に依存することになる。可知的な思考内容そのものを受け入れるのはヌース・デュナメイ、受け取る知性 *ψα* がある (cf. PA, 1434, 165) が、この知性はしたがって表象能力に依存して働くのであり、この表象能力が、考えることが像を思い浮かべることを意味する場合がある限りで、思考 *διανοητικόν* と呼ばれ、¹⁶⁾ また抽象的な思考内容の可塑的な素材として、

変様を受ける知性 νοῦς παθητικός (『魂にひびく』三卷五章30a24, cf., PA, 205f)⁽¹⁷⁾ と呼ばれる。

プレタノーは一般に、表象内容なしに思考することはできず、思考する場合には何らかのかたちで表象内容が関与している⁽¹⁸⁾と主張する (PA, 206-210)。このことから、思考能力すなわち受け取る知性はそれ自体としては肉体から独立しているにもかかわらず、加齢などの肉体の衰えによって思考能力もまた衰えることが説明される。(PA, 207-8)。適切な表象内容を提供する能力じたいは肉体に属するので、この能力は肉体とともに可滅的なものであり、病気や加齢などの影響を受けるといふ意味で変様を受ける。

一、三、働きかける知性(ヌース・ポイエーティコス)

最後に本丸であるヌース・ポイエーティコス、働きかける知性が論じられる。この知性はどのような働きをしているのか。プレタノーによると、歴史的にはとりわけアヴィケンナやアヴェロエスら「アラブの注釈者たち」にその傾向が強いとされているが、認識のさいに神が人間へと及ぼす働きかけたとする解釈が一定の伝統を形成していた (PA, 823)。しかしプレタノーの解釈は、神からの働きかけとしての精神的な力を排除して、ヌース・ポイエーティコスを人間の個人において生じる働きとしており、彼によれば歴史的にはこれはトマス・アクィナスの解釈に近い (PA, 24)⁽¹⁹⁾。

ここには多くの論点があるが、筆者にとって重要と思われる二点を挙げたい。まず一点目は、アリストテレスのプラトンの相違を論じている文脈 (PA, 131-6) で問題になる。三卷四章で、アリストテレスが「肉的存在を το σαρκεῖ ἐῖναι」認識することと「肉そのものを σάρκα」認識することは、異なるものを別々に認識しているのか、それとも一つの同じものを異なる仕方で認識しているのか、を問題にしている箇所がある (429b12-3)。プレタノーによれば、この肉そのものとは自然的事物としての個物、肉的存在とはその形相・本質の事例としてとりあげられている。プラトンならば、普遍的なイデアは個物から独立に存在するものであり、感性的事物に関して、その普遍者と、個物とは一致しないと言うだろう。アリスト

テレスもこの相違じたいについては同意するとブレンターノは述べる (PA, 132)。では肉そのものと肉の本質とは別々の異なるものなのか、それとも同じ一つのも物が別様に受け取られるのだろうか。プラトンにおいては前者であるが、アリストテレスはどうか。

例えば、「白いもの」と「温かいもの」があったとする。前者は視覚の対象であり、後者は触覚の対象となる。もしこれらが同一のもの（例えば肉まん）であつたとしても、それぞれを捉える感覚は異なるのだから、両者の同一性は付帯的の *accidens* なものであり、これは「非本来的な同一性」である。しかし「温かいもの」と、「温かい存在」の場合には、「本質的同一性」が存するとブレンターノは言う (PA, 133)。前者は感覚により、後者は知性により捉えられるのであり、感覚によつて捉えられる温かいものが、温かいものの本質によつて説明され定義される。もし両者が別々のものならば、Xの本質はXとは無関係に認識されることになるが、それはそもそもXの認識と言えるのだろうか。自然研究者が木や草を認識しようとして、木や草とは別の世界にある存在者を把握したとしたら、彼は目標に到達していないのではないだろうか。そう考えると、両者は別々のものではなく、同じ一つのものから異なる仕方を取つてこられたものでなければならぬ。「知性 *Verstand* が肉の存在を認識するとき、別の非質料的な何かではなく、感覚のうちにある同じ客観 *Objekt* が、感覚から受け取られる。しかし知性においてはその客観は抽象的であるが、感覚においては個体的な質料をそなえて具体的なのである」 (PA, 135)。「知性のうちにあるものは感性のうちにもあるのであり、しかしそれぞれ別の仕方であるのである」 (*ibid.*)。こうして肉的存在は肉そのものの表象内容から取つてこられ、知性のうちに受け入れられる。ここでは上述のヌース・パテーティコスとしての表象内容が不可欠である。しかし受け入れる働きそのものはヌース・ポイエーティコスではなく、むしろ受け取る知性、ヌース・デユナメイである。ではここでさらにヌース・ポイエーティコスが要請されるのはどうしてだろうか。

ここで第二に、精神的なものと物質的なものとのギャップが問題となる (PA, 163)。精神的な領域は物質的な領域に対し

て純粹であり、独立しているので、変様を被るという意味で働きかけられることはない。しかしそうだとすれば、物質的なもののうちにある表象内容がいかにして精神へと関係し、抽象的な思考内容を提供することができのかが謎になってくる。この謎を解消するために、精神的なものの方から自らを開き、物質的なものに向けていわば手を伸ばし、そこに伏在している可知的形相が自分に対して働きかけ、自分の中で現実化するよう、物質的なものに促すような、意識に先立つ働きが考えられよう。これがヌース・ポイエーティコスである。

この働きを、ブレンターノはやすり屑に磁石を近づけると、一定の距離が維持されたままでも、磁力でやすり屑が持ち上がっていく様子にたとえている。

「それゆえ感性的部分のうちに現在の、感性的部分へと影響を与えて、その結果として間接的に、知性的魂の運動と精神的な認識とを生じさせるような、何か精神的なものが存在するのでもない。しかしこの精神的なものは、知性的魂そのものでないとしたら、いったい何であろうか？ それゆえ知性的魂は、磁石がやすり屑を自分のほうに持ち上げ、それからこれらの屑に触れられるように、感性的部分にたいしてある種の惹きつけるような影響をおよぼし、そうしていまや感性的部分が知性的魂に向かっていわば努力して進み、そして適及的に知性的魂のうちに、概念の発生と結びつくあの変化を生じさせる、というのでなければならぬ」(PA, 164)。

最初に見たように、もともと植物的部分の栄養摂取能力の類比物として導入されたために、この知性の働きは無意識的なものとされているが、ここではそのことの正当化がなされる。この働きが意識的なものでないことにより、可知的な思考内容がいわばアプリオリであり必然的な本質真理のようなものであることが保証される。⁽²⁰⁾「この感性的部分への働きかけを発するものは、意志の活動ではない、というのは明らかである、というのもこの働きかけは、どんな精神的な認識作用によつ

でもすでに前提されているものであって、われわれの恣意からは遠ざけられており、無意識に行われるからである」(ibid.)。この見解を敷衍すると、これまでも意識される働きだとすると、能動的である以上、意志のようなものになってしまう。つまり私たちは思考内容を、好きなように受け取ったり受け取らなかつたり、また好きな部分だけ受け取ったりできることになってしまふ。そうすると、三角形の角や辺にかかわる公理のような本来アプリアリもしくは必然的な真理²⁴⁾が、人間の恣意や傾向に左右されるような経験的で偶然的なものになってしまう。おそらくそういったことを彼は考えているようである²⁵⁾。

まとめよう。ブレンターノによれば、ヌース・ポイエーティコスとは、魂の知性的部分に備わる能力であり、栄養摂取と同様、無意識の働きである。知性的部分には他にも、理念的形相を捉える能力、知的な欲求能力(意志)、知性的に身体を動かす能力が備わっている。とりわけ思考内容としての形相を捉える能力に関しては、その中心となるのは受け取る知性(ヌース・デユナメイ)であり、これが一般に思考能力とされるものであるが、そこには働きかける知性つまりヌース・ポイエーティコスと、感性的部分の側からは表象能力も関与している。土台となる表象内容は肉體、物體的なものに属するが、働きかける知性が精神的なものから物體的なものへの通路を開き、その通路を通じて、表象内容から抽象された思考内容が、知性的部分の精神的な領域へと受け入れられるのである。

二、『経験的立場からの心理学』と無意識のゆくえ

以上でPAのヌース・ポイエーティコスの理論を素描するという本論の第一の目標は達成したとする。次に第二の目標に向かい、『経験的立場からの心理学』(PES)における「無意識」の余地について論じたい。

PESでは、ブレンターノが打ち立てようとする新たな心理学の構想が提示されているが、そこでは心理学は心・魂の学ではなく、「心的現象の学」と定義される(PES/L, 16, 27)。心理学の対象は心的現象 psychisches Phänomen であるという宣

言は、実体としての魂の概念から縁を切る、という含意を持っている⁽²³⁾。PAでも、魂を身体から独立しても存在する強い意味での実体として捉えるという側面がそれほど目立ったわけではなく、基本的にはむしろあくまでも身体の形相・現実態として、身体と魂が切り離しえないとする側面のほうが強調されていたが（cf. PA, 50ff）、PESではさらに、心的現象は私たちに對する心的な現れとして、現象として性格づけられる⁽²⁴⁾。

また、心的現象は物的現象と対比される。物的現象とは、色、形、今見ている情景、和音、熱、冷たさ、匂い、また想像内容として現れるこれらの対応物など（PES/I, 112）、要するにそれ自身は心的作用ではなく、表象の内容となるにすぎないものである。これに對して、心的現象とは、心的な作用全般のことである。感覚作用、想像作用、音を聞くこと、色を見ること、熱や冷たさを感じることに、それに対応する想像作用。普遍概念について思考すること、判断・想起・予期・推論・確信・思念・疑い。また喜び・悲しみ・恐怖・怒り・愛・憎しみ・欲求・意志・驚き等々、あらゆる情動である（PES/I, 111）。これらの心的現象は、志向性をもつことをその本質的特徴とする。

二、一、心的現象の本質的特性。志向性と内的知覚

こうして心理学は心的現象についての学とされるが、では心理学の対象となる心的現象とはどのようなものだろうか。ブレンターノはPESの二巻一章（PES, 109-140）で、心的現象の本質的特性を6つないし7つほど挙げている。列挙すると以下のようになる。

すべての心的現象は、そして心的現象のみが、

（M1）…表象であるか、あるいは表象を基礎としてもつ。

（M2）…空間的に延長していない。

(M3) …志向的である。

(M4) …内的に知覚されている。

(M4') …勝義での知覚の対象である。

(M5) …単なる現れではなく、実在でもある。

(M6) …必然的に、われわれにとって統一として現れる。

さてこれらのうち本論において重要であるのは、M3およびM4である。M3の志向性は有名であろう。ブレンターノは現代の現象学や心の哲学に、心は「何か或るもの」についての関係である、という志向性の概念をもたらしたことで知られている。よく知られた箇所だがいちおう引用しておく。

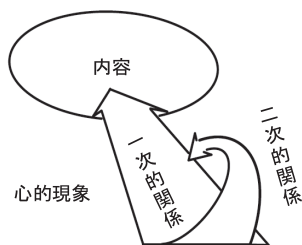
「あらゆる心的現象は、中世のスコラ学者たちが対象の志向的 *intentionale* (あるいはまた心的 *mentale*) 内存在 *Inexistenz* と名づけたものによって特徴づけられる。われわれはこれを、まったく曖昧でない表現というわけではないが、ある内容への関係、ある客観 *Object* (ここでは実在だと理解されてはならない) への方向、あるいは内在的な対象性などとも呼ぶことができる。どんな心的現象も、すべてが同じ仕方ではないにせよ、何か或るものを客観として自らのうちに含む。表象においては何かが表象され、判断においては何かが承認されあるいは拒絶され、愛においては愛され、憎しみにおいては憎まれ、欲求においては欲求され、等々されている」(PES/I, 124-125)。

見られるように、心的現象が志向的である(M3)とは、自身がもつ内容へと向かう作用であるということであり、志向性とはその内容にたいする関係のことを表している。

これに対して内的に知覚されている（M 4）とは、内容への関係である作用がそれ自身知覚されているということである。ブレンターノは、客観ないし内容への志向性の関係を一次的関係、内的知覚への関係を二次的關係と呼んでいる（下図）。

彼が強調するのは、一次的関係をそれ自身独立して成立する一階の意識とし、その一方で二次的關係は、あくまでも一次的関係が土台として成立した上で、そこへと反省的に眼を向ける二階の意識として成立する、というのではなく、むしろ、一次的関係と二次的關係とは心的事実として分かち難く統一をなしており、同時に成立しているということである。つまりある心的活動が遂行されているからには、その活動には内的知覚がかならず随伴しており、まさしく現象として現れている。この点で内的知覚は、当時の内観心理学の方法とされていた「内的観察・innere Beobachtung」（内観・introspection）とは区別される（PES/L, 40-48）。例えば怒りの感情が起こっているとき、怒りの感情からいわば身を引いて、それを観察するもう一つ別の作用のうちに生きるのではなく（じっさいそうすると、怒りの感情は鎮められ、観察対象が変様し、ついには消滅してしまうだろう）、怒りの感情そのものを生きながら、同時にその感情それ自体が知覚され、意識されるのである。

こうして心的現象は原則的に意識されており、この意識の領域をPESは探求することになる。ブレンターノはPESでは二つの章を割いて、当時すでに議論のあった「無意識」が存在する余地はあるのかという問題を論じている（二巻二・三章、PES, 141-220）。結論として、あらゆる心的作用は意識されていると言われ（PES/L, 218）、無意識を考慮する必要はないとされる。⁽⁹⁾



二、二、「無意識の意識」の形而上学的可能性

しかし、M3とM4、志向性と内的知覚、一次的関係と二次的關係とが、分ち難く一つの同じ心的事実を形成しており、一方に他方がかならず伴っていると言っても、この二つの特性は概念的にも同義であるというわけではない。例えば独身であることが結婚していないことと同じであるというようなものとは事情が異なるわけである。したがって、内的知覚を欠いた志向的作用、「志向的作用であるが現象していないもの」を、たとえ私たち自身の経験の中にどこにも見出せないにしても、概念上考えることは可能である。つまりここでは、いわゆる「無意識の意識」とでも表されるべきものが問題になっているのだが、これはまさしく形容矛盾であり、概念からしてありえないもののように思われるかもしれない。しかしこの点に関して、ブレンターノは註で重要なことを述べている。

「われわれは「無意識」という語を二通りのしかたで使用する。一つには能動的に、すなわちある事象を意識していないものについて、それから受動的に、つまりある人が意識していない事象について（「無意識」という語を使う）。前者の意味において「無意識の意識」と言うならばそれは矛盾であろうが、第二の意味においては矛盾ではなく、これこそが、「無意識」という語がここで受け取られている意味なのである」（PES/L143note）。

つまり一方では文法的に能動的な意味で、意識する主体、意識をもつ者は意識的であり、これに対応して、意識を備えていない物や出来事は無意識と言われる。しかしまた文法的に受動的な意味でも、意識されている当のもの、対象や心的生起が、意識的と言われ、意識されていないならば無意識的と言われる。したがって前者の意味で意識の特性をそなえた心的作用が、後者の意味で意識されておらず、現れていないということ、本論の文脈に戻せば内的に知覚されていない、ということは論理的にありうるのであり、この意味で「無意識の意識」はありうるのである。

こうして内的に知覚されていないが志向性をもつもの、M4を充たさないがM3は充たすものは可能である。ただし同様に、M4（およびM4'）を充たさないがM1～M6のうちM4以外を充たすものも不可能ではないだろう。そこで、M4（およびM4'）以外のいずれかの本質的特徴を、心的なものの定義的な特徴と決めてしまえば、心的でありながら現象していないものの余地を認めることが可能になるが、どの特徴を選ぶべきか。そこでブレントラー自身はやはり、M3すなわち志向的であることを、心的現象のもつとも本質的な特性だと考えている。「心的現象をもつともよく印づけるのは、疑いなく志向的内存在である」（PES, I, 137）。つまりM1～M6の中でもつとも強く心的現象を特徴づけるのは志向性テーゼであり、これに比べるとその他の特徴づけはより本質的でなく、派生的なものとなる。そこで志向性を心的なものの定義的な特徴だとすることにより、志向的であり、したがって心的なものではあるが、しかし内的知覚を欠いているという意味で無意識であるものの余地を認めることができる。

クリーゲル（Kriegel, 2017）が提示しているのはこのような解釈であると思われる。彼はここでクリプキ『名指しと必然性』（Kripke, 1972）の議論を援用し、心的現象とは一方で「自然種」「実在的範疇」であると性格づける（Kriegel, 2017: 201f）。水がH₂Oであること、馬が特定のDNAを備えていることなど、自然種がもつ本質的性格は私たちがそれを認識するかどうかに依存しないものである。したがってそのような自然種に関する真理はアポステリオリであるが必然的な真理ということになる。これと同様に考えてみると、心が志向的であることは自然種としての心が持つ本質的特性であり、私たちにとって心が現れているか、知覚されているかどうかには依存しない。それが認識されないこともありうるという意味でアポステリオリだが、必然的である²⁷。

二、三、指示を固定するものとしての内的知覚

他方、クリーゲルは内的知覚テーゼを「指示を固定するもの reference-fixer」と特徴づける（Kriegel, 2017: 211ff, 220ff）。上

で述べたアポストリオリだが必然的な真理とは反対に、アポストリオリだが偶然的な真理について考えてみよう。クリプキはそのような事柄の例として、一メートル原器である棒Sに関する、「棒Sは一メートルの長さである」という命題を挙げている。そもそもメートル法における単位メートルの基準になるのが棒Sである限りでは、これは一メートルという語の約定をしているという意味で、アポストリオリに真だと言える。しかしここでは単に「一メートル」という概念にそのような「意味を与える give the meaning」²⁾によってそこに「一メートル＝棒Sの長さ」という同義性を設定するだけではなく、その語の「指示を固定している fix the reference」のたとくりプキは言う (Kripke, 1980=1985: 55=65)。つまり問題になっているのは、意味や概念のレベルではなく、指示対象のレベルなのである。別様にもありえた存在者としての棒Sの長さがたまたまこの長さであり、一メートルという長さは、棒Sという指示対象の偶然的な、実質的な長さを受け取っている。「一メートル」という語が、定義上棒Sの長さを意味するのならば、意味の上では「一メートル」は「棒Sの長さ」以外ではありえず、この等置はアポストリオリに真である。しかし形而上学的に言えば、棒Sはいま私たちの知っている10センチに相当する長さでもありえたのであり、そのような可能世界では私たちの10センチの長さが「一メートル」になっただろう。こう考えると、上の命題は指示を固定することにかんして偶然性にかかわっているため、アポストリオリだが偶然的な命題だと言えることになる。

この議論を内的知覚に当てはめてみると以下になるだろう。心的現象は内的に知覚されているという本質的特性をもつ。それは現象であり、現象とは現れているものだから、「一メートル」がアポストリオリに「棒Sの長さ」を意味するのと同じように、「心的現象」とはいわばアポストリオリに、現れているもの、「内的に知覚されるもの」である³⁾。しかしその実質においては、心的なものは私が経験するということから独立に、例えば志向的であるという特定の本質的特性をもつ。そして内的知覚と志向性との結びつきは私の経験の外側にも広がっている形而上学的な必然性ではなく、内的に知覚されていないが志向的であるような心的なもの、それはそれで形而上学的に可能であるということになる。

出されることになる。アリストテレスの魂論からブレンターノが読み取った無意識の働きとしてのヌース・ポイエーティコスも、ここに想定可能である。

まとめ

本発表ではまず、『アリストテレスの心理学』における魂の諸能力の体系を素描し、そこでのヌース・ポイエーティコスの位置づけを確認した。このヌースは植物の栄養摂取能力との類比によって導入されており、植物的能力と同様に無意識に働く力と性格づけられている。この点で、このヌースは恣意的な意志作用から区別され、そのことが可知的なものの本質必然性を傷つけないとされる。本発表の前半部ではこのような関連を示した。

後半では、魂のそのような無意識の働きが一見すると『経験的立場からの心理学』から排除されているように思われ、それは心的現象の内的知覚テーゼによるのであるが、しかしこの排除は見かけの上でのものにすぎず、心的現象の議論は無意識的にかつ心的なものの余地を認めないわけではなく、それと形而上学的に両立可能となるような理解が可能であることを示した。

このような解釈はクリーゲル自身が言うように (Kriegel 2017: 222f)、心の概念を現代の心の哲学が視野に収めているのと同じ広さに拡張するものであり、しかもブレンターノに特有の心的現象については、内的に知覚され、それ自身つねに現れているという性格を損なわない。ただしそのように位置づけられたとき、志向性という語彙を使わないで規定されていたヌース・ポイエーティコスが、志向的であると言えるのか、あるいは一般に、無意識的に志向的であるとはどういうことか、ということとはあらためて問題になるかもしれない。もともと植物的な栄養摂取の働きの類比物として導入されたからには、志向性として扱われるよりは、むしろ因果的作用に近づけて考えられるべきではないのか。あるいはそれは、現象学でよくな

されるように、因果性と志向性とは画然と区別されないようなレベルでの、極めて原始的な働きなのかもしれない。しかしこれはこれでまた、志向性をめぐる現代の諸問題に通じてくるように思われる。

もっとも筆者自身は、そもそもヌース・ポイエーティコスとはどういうものであったのか、またそれが無意識であるということはどういうことであるのかを理解したいという動機から本論の考察に至った。テキスト内在的なアプローチとより現代的な見地からの再構成というアプローチの兼ね合いが拙い点については読書の方々からの忌憚のないご意見を仰ぎたいが、本論での考察をつうじて、筆者自身の専門である現象学をはじめ、哲学一般の見え方が、さらには世界の見え方が変わったことは確かである。⁽²⁹⁾

註

- (1) この書をきっかけとして、一八八二年の暮れから一八八三年にかけて、エードワルト・ツェラー (Eduard Zeller, 1814-1908) と神学的なヌースの解釈をめぐって激しい論争が起こった。またアリストテレス研究者として著名なロス (William David Ross, 1877-1971) も、この論争に大いに注目していた (cf. Tanăşescu, 2023, XI)。
- (2) 十九世紀の心理主義哲学の文脈でも、依然として心理学を魂の学と定義する人々はいた。ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart, 1776-1841) やロッツェ (Hermann Lotze, 1817-81) がそうである。この点については (Textor, 2021, 17-43) 参照。
- (3) この点で甲斐 (2013, 166-7) はブレントラーの両著作の關係について本論と類似した見解であるように思われる。
- (4) 同様の議論は (PA, 82, 103note75, 109, 179f) にもみられ、感覚能力 (PA, 82) や場所的運動能力 (PA, 109) / 思考能力 (PA, 179-180) にも適用されている。この論じ方は、作用と対象との相關關係にもとづき、自身が志向的に向かっている対象ないしノエマを「導きの糸」として、そこから遡及的に現在の意識作用を規定するという、フッサールの現象学的意識分析の手続きと似ていると言える (例えば『デカルト的省察』§§ 21, 43, Hua. I, 87, 122f)。なお Object はのちに述べる事情から本論では Gegenstand と区別し

て総じて「客観」と訳すが、このみ「対象」と訳した。

- (5) なお中畑 (2011, 55)、甲斐 (2013, 163) は外在主義的な認識観にもとづいて、活動に対するこの対象の先行性を因果的なもの、つまり結果に対する原因の関係を捉えており (じつさいこの箇所では植物的部分の栄養摂取能力が問題なのだからそれは自然である)、「現象学的な」解釈は標準的ではなさそうである。

- (6) この呼び名はプレンターノのものではなく、便宜的に筆者がつけた。

- (7) 例えば『形而上学』十二巻三章1070a4が参照されている。また『魂について』では二巻五章410b35など。ちなみにここで、自然物どうしの場合に同義性と呼ばれるのはよいとしても、技術の場合に生産物の観念と生産物との関係を同義的と言うのには疑問が残るが、プレンターノはMBSで扱ったような類比の議論をここでは引き合いに出していない。

- (8) 『魂について』二巻四章410b1、『生成消滅論』二巻十章336a27など参照。

- (9) ここにはPESにおける心的現象についてのテーゼM1 (後述)、「心的現象はそれ自身表象であるか、表象を基礎にもつかのいずれかである」(PES-I, 112ff) のアリストテレスにおける対応物が見られる。

- (10) 「無意識的傾向 *unbewusste Neigung*」「意識的努力 *bewußtes Streben*」という表現はプレンターノ自身のものである (PA, 65)。しばしば言われる、古代ギリシア哲学は、現代で言われるような「意識」の概念をもっていなかった、という問題を、プレンターノが気にしているようには思われない。

- (11) たとえばアリストテレスが「悪徳」について、理性と無関係な単なる獣性ではなく、魂においてロゴスをもつ部分が損なわれていることだとしている (1150a1) 箇所が参照される。つまり理性的欲求があることを前提した上で、それが損なわれることが悪徳であると規定することができる。ここでプレンターノ自身は直接論じてはいないが、有名なアクラシア (意志の弱さ・抑制のなさ) の問題なども、こうした理性的な意志と感性的欲求の区別 (cf. PA, 158f) をふまえて議論できるかもしれない。

- (12) よく言われるように、客観的 *objective* という語は中世から近世哲学ぐらゐまでは、心によって立てられたものの、表象されたものを意味しており (その場合、表象的、想念などと訳される、外界に存在し三人称的視点から誰にとっても同じようにアクセスできるものというような意味ではなかった。プレンターノ自身、この語の現代の意味と中世のスコラ哲学における意味のこの違いに注意を喚起している。「われわれは「客観的 *objective*」という表現をここで、またこれ以降も、近代において通例であるよう

- な意味においてではなく、中世のアリストテレス主義者たちがよくそれに（スコラ的な objective に）結びつけるような意味で使用するが、この意味はアリストテレスの教説を非常に短く正確に言い表すことができる。物質的には、物理的特性として、冷たさは冷たいもののうちにある。客観 Object としては、つまり感覚されたものとしては、冷たさは冷たさを感じることのうちにある。『魂について』三巻二章4節 425b25以下参照。そこでアリストテレスは、アイステートン・カト・エネルゲイアン（現実性における可感的なもの）がその感官のうちにあると述べている」（PA, 80note6）。
- (13) ここでは二つの理由を挙げたが、ブレンターノ自身はもう一つ別の証明も挙げており（PA, 124-126）、知性の離在可能性について合計三つの証明が見られる。本論の論旨に照らして割愛した。
- (14) この点でブレンターノは、ヌース・ポイエーティコスと人間の認識能力と考えるのはむしろ誤りだと考えている（cf. PA, 114）。人間の個人の認識能力の本体はあくまでヌース・デユナメイであり、それは感覚能力に類似した、受動的な受け取る能力であって（PA, 114）、能動的な働きかける能力ではない。
- (15) 筆者の目下の見通しによれば、この論点はブレンターノの師であるトレンデレンブルク（Adolf Trendelenburg, 1802-1872）のヘーゲルの「純粹思惟」への批判（cf. Beiser 2014: 60ff）となった論点を受け継ぐもののように思われる（トレンデレンブルクは青年ブレンターノにアリストテレスの手ほどきをした人物である）。彼によれば思惟とは運動であり経験的内容に依存してのみ発動するものであり（ibid.）、この運動の概念を彼はアリストテレス研究から得たとされる（ibid., 36ff）。また他方、フッサールの『論理学研究』における範疇的代表象の理論（Hua, XIX/2, 694ff）も、ブレンターノのこのあたりの議論を彼なりに再構成したものだと思われることができる。
- (16) ブレンターノはこれを「感性的思考 sinnliches Denken」と訳している。ここでは『魂について』一卷四章（408b25-26）が引用されている。
- (17) この箇所は、アリストテレス自身がこのヌースを可減的と表現している箇所である。このヌースを表象だと考えれば、それは感性的部分に属し、肉体に依存するので、肉体とともに減じる。その一方でそれと区別される受け取る知性のほうは精神に属し、不滅であり、いわばフッサールの言う超越論的な領野のようなものである。この解釈は、この箇所を受け取る知性そのものと読んでしまうと採用できないことになる。

(18) 一応注記しておく、こういう主張のさいに、思考ということでプレントノーは強い意味での洞察的な思考のことを念頭に置いており、洞察を欠いた、記号を機械的に操作する思考などは度外視されていると考えられる。

(19) PAにおいてトマス・アクィナスはもともと重要なアリストテレス解釈者の一人とされるが、ここでもプレントノーは単純に彼の解釈を総じて受け入れているわけでも、全体的に否定しているわけでもなく、部分的に受け入れたり、批判したりしている。また『魂論註解』だけでなく、『神学大全』や『対異教大全』、『形而上学註解』なども参照されている (cf. Torrijos-Castillejo, XXII)。人間の個人にヌース・ポイエーティコスが属するという解釈は『魂論註解』による。

(20) この点は、プレントノーが基本的には高く評価しつつ踏襲しているトマスの解釈とは異なる、特筆すべき点である。働きかける知性を意識的な働きであるとし、その結果、理性的な意志と混同してしまった点で、トマスは間違っていると指摘される (PA, 226⁷)。トマスはこの知性が意志に依存するものであるとし、また意識的なものであるとしている (cf. Torrijos-Castillejo, XXV)。プレントノーは『魂について』三卷五章 (430a20f) の「ただし可能態にある知識は、個人においては時間の上でより先であるが、全体としては時間の上でさきより先のものではない」という箇所を、個人においてはあらかじめ能力があったうえで現実の認識が成立するが、神的知性においてはあらゆる可知的なものが現実的であるから、マクロな観点から見れば個人の認識能力はその神的知性における現実の可知的思考内容にしたがうという趣旨で解釈しており (PA, 123ff)、要するに可知的な思考内容のアプリオリ性ないし必然性を述べていると理解してよいだろう。

(22) アリストテレス解釈として正当化しうるかを別としても、そのものとしてこの論点は妥当なのかについては、議論の余地があるだろう。能動的で、意識的で、かつ恣意的ではないような心的作用はありえるかもしれないが、もしあるのであればこの論点には飛躍があることになる。例えば母語で自由に話すとき、意識的にまた能動的に話しているが、しかしその言語の文法については従わざるをえず、恣意性はないが、この例は適切であろうか。また、膝蓋腱反射の検査で、膝をたたくと膝下が跳ね上がるという運動の場合には、それが私の運動であるという自己所有感 sense of ownership はあるが、私の意のままにはならないという意味で行為者感 sense of agency は伴っていない (あるいは行為者感が伴っていない以上能動的ではないという見解もありうる)。いずれにせよ、現象学における志向性の超越もやはり恣意に委ねられるものではないから、ここでもプレントノーは現象学の重要な論点に先取り的にかかわっていると言えよう。

- (23) 当時の心理主義哲学の文脈でも、依然として心理学を魂の学と定義する人々はいた。ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart, 1776-1841) やロッツェ (Hermann Lotze, 1817-81) がそうである。この点については (Textor2021, 17-43) 参照。
- (24) 奇しくもブレンターノはこのランゲの言葉を借りて、自身の心理学を「魂なき心理学 Psychologie ohne Seele」と性格づけている (PES, 1, 16)。
- (25) なおこの表現は『記述的心理学 *Deskriptive Psychologie*』のものであり、この書は一八八〇年代の講義ノートが編集されたものである (この書とPESの議論との異同についても議論があるが、ここでは基本的に同じとみなしてよい)。PESではこの関係の客観として一次的客観・二次的客観という言い方がなされている (PES, 180ff)。
- (26) この点についてPESで再びトマスが論敵として挙げられるが、今度はトマスは先ほどとは逆に、無意識を認める論者として挙げられている点が興味深い。彼について長大な註が付され (PES, 1, 176-179)、それによると、まず感性的作用について言えば、知覚意識を担う感官は物質に属しており、物質は自己自身に關係することができないので、上のような内的知覚の構えをとることができない。また知性的作用について言えば、自己自身に關係することはできるが、思考内容はそのつどつねに一つしか受け入れられないので、同時的な自己意識は考えられず、作用についての作用は事後的なものではないことになる。いずれも『神学大全』が参照されている。
- (27) ここまで本論の前半部の議論では何度か「アプリオリあるいは必然的な」真理というように、アプリオリと必然性とを並置してきたが、ここからはクリプキ的な用法にならない、アプリオリ／アポステリオリと必然的／偶然的という概念対を区別する。
- (28) ただしブレンターノは、アプリオリという語をおそらく自覚的に避けており、ほとんどこの語を使うことはない。
- (29) 謝辞…本論は九州大学哲学会令和六年度大会 (二〇二四年九月二八日開催) でのシンポジウム「ヌース・ポイエーティコスとの向き合い方」にて登壇し、「ヌース・ポイエーティコスと「無意識」のゆくえ——アリストテレスの魂論と、「心的現象の学」との連続性について」と題して発表した原稿の内容に加筆修正したものである。企画および当日の司会を担当された九州大学の倉田剛氏、また実質的な企画実現や交通宿泊の配慮から、発表原稿検討会、当日の登壇者としての発表にいたるまで尽力くださった現九州国際大学の酒井健太郎氏、さらには当日聴講し質問をいただいた同会会員の方々、本稿編集担当の方々に深く御礼申し上げます。

また本論は二〇一七年度から筆者が酒井健太郎氏、富山大学の池田真治氏に私的に呼びかけて始めたブレンターノ『アリストテレスの心理学』訳読研究会における、(途中一年ほどの中断もあったが)およそ六年にわたる研究の成果である。公私ともに多忙をきわめるなか貴重な時間を割いてお付き合いいただいたお二人には、この場を借りて感謝申し上げたい。

文献

- Aristoteles (1831): *Aristoteles Graece ex Recensione Immanuel Bekkeri*. Akademia Regia Borussia.
Beiser, Frederick (2014): *Late German Idealism. Trendelenburg and Lotze*. Oxford University Press
Brentano, Franz (1862): *Von der mannigfachen Bedeutung des Seienden nach Aristoteles*. Herber'sche Verlags-handlung, 1862 (略号: MSA)
Brentano, Franz (1867): *Die Psychologie des Aristoteles, insbesondere seine Lehre vom ΝΟΥΣ ΠΟΙΗΤΙΚΟΣ*. Verlag von Franz Kirchheim (略号: PA)
Brentano, Franz (1874): *Die Psychologie vom empirischen Standpunkt. Erster Band*. O. Kraus (ed.), Felix Meiner Verlag (Philosophische Bibliothek 192, 1924 (略号: PES/I)
Brentano, Franz (1911): *Die Psychologie vom empirischen Standpunkt. Zweiter Band, Von der Klassifikation der psychischen Phänomene*. O. Kraus (ed.), Felix Meiner Verlag (Philosophische Bibliothek 193, 1925 (略号: PES/II)
Brentano, F. (1982): *Descriptive Psychology*. hrsg. R. Chisholm & W. Baumgartner, Felix Meiner Verlag (Philosophische Bibliothek 349)
Boring, Edwin (1950): *A History of Experimental Psychology*. 2nd edition, Prentice Hall Inc.
Husserl, Edmund.: *Husserliana. Gesammelte Werke*. Springer. (Hua., 卷号(ローマ数字)・ページ数(アラビア数字)で表記)
Kai, Hitomi 甲斐博見 (2013): 「書評」心の哲学の概念史的研究 中畑正志著『魂の変容 心的基礎概念の歴史的構成』『西日本哲学年報』110113年21巻 p.161-168
Krantz, Susan (1990): "Brentano on 'Unconscious Consciousness'" *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. 50, No. 4, pp. 745-753

- Kriegel, Uriah (2017): "Brentano's Concept of Mind: Underlying Nature, Reference-Fixing, and the Mark of the Mental". S. Lapointe and C. Pincock (eds.), *Innovations in the History of Analytical Philosophy*, Palgrave Innovations in Philosophy
- Kriegel, Uriah (2018): *Brentano's Philosophical System. Mind, Being, Value*. Oxford University Press
- Kripke, Saul (1972): *Naming and Necessity*. Blackwell Publishing. (= (1985) 『名づけと必然性 様相の形而上学と心身問題』 八木沢敬・野家啓一訳、産業図書)
- Nakahata, Masashi 中畑正博 (2011) : 『魂の姿容 心的基礎概念の歴史的構成』 岩波書店
- Tănăsescu, Ion (2023): „Brentano und Zeller: Ihre Auffassungen von der Geschichte der Philosophie und dem Aristotelischen Νοῦς Πανταρχός". (in: Brentano, F. (2023): *Aristoteles Lehre vom Ursprung des menschlichen Geistes*. Sämtliche veröffentlichte Schriften, Bd. VI, De Gruyter, pp. XI-LXI)
- Textor, Mark (2021): *The Disappearance of the Soul and the Turn against Metaphysics. Austrian Philosophy 1874-1918*. Oxford University Press
- Torrijos-Castortillejo, David (2024): „Franz Brentanos Psychologie des Aristoteles. Einführung" (in: Brentano, F. (2024): *Die Psychologie des Aristoteles, insbesondere seine Lehre vom ΝΟΥΣ ΠΑΝΤΑΡΧΟΣ*. Sämtliche veröffentlichte Schriften, Bd. V, De Gruyter, pp. XI-XLVI)
- (東海大学文学部・教授)

